

# ビブリオ・バルニフィカス感染症の予防に関する研究

(衛生微生物科) 山崎 省吾 (水質科) 右田 雄二 他

## はじめに

ビブリオ・バルニフィカス感染症は、日和見的な散発発生がほとんどであるが、その死亡率は高く、患者の約7割とされる。有明海沿岸4県で全国の患者の約4割を占め、長崎県においても過去15例の患者が報告されている。しかしながら、本感染症は感染症法及び食品衛生法の中で、医師の届出対象疾患とはなっておらず、患者実態の把握が困難な状況にある。また、わが国での本細菌の環境調査などが不足しており、本菌による感染の危険性の評価や予防対策に必要なデータは充分ではない。

そこで、県内の患者発生動向調査と併せ我々を取り巻く環境及び食品中の汚染実態を調査し、発症危害を分析し、予防対策を早急に講ずることが重要であると考えます。

## 調査・研究の概要

本研究は以下の4項目で構成される。

- ① 長崎県下におけるビブリオ・バルニフィカス感染症患者発生動向調査
- ② 長崎県下におけるビブリオ・バルニフィカスの環境および食品の汚染実態調査
- ③ 各種ストレス環境下におけるビブリオ・バルニフィカスの応答に関する研究
- ④ 本感染症の発症危害に関する評価(最終報告)

研究期間:平成18～20年度

## 平成18年度 研究の概要

今回、項目②「長崎県下におけるビブリオ・バルニフィカスの食品および環境の汚染実態調査」について調査した。

食品: 長崎県を含む全国5地域での魚介類の *Vibrio vulnificus* 菌数を比較した。

海水: 有明海を中心とした長崎県沿岸7地点の海水を調査し、*Vibrio vulnificus* 菌数(MPN-培養法, MPN-PCR 法)と各種環境因子(DO(溶存酸素), pH, 塩分, 水温, 生菌数)との相関を求めた。

また、食中毒菌として広く知られている同属菌の腸炎ビブリオ *V. parahaemolyticus* 菌数(MPN-培養法)を同様に求め、*Vibrio vulnificus* との環境中での違いを比較した。

以上の研究の中間結果について、紹介する。